

作成日	2024 年 6 月 30 日
学科名	国文学科

教育・学習

1. 現状分析

自己評価：(S) A・B・C

評価項目①

達成すべき学習成果を明確にし、教育・学習の基本的なあり方を示していること。

<評価の視点>

- ・学位授与方針において、学生が修得すべき知識、技能、態度等の学習成果を明らかにしているか。また、教育課程の編成・実施方針において、学習成果を達成するために必要な教育課程及び教育・学習の方法を明確にしているか。
- ・上記の学習成果は授与する学位にふさわしいか。

参照資料

- ・学位授与の方針
- ・教育課程編成・実施の方針
- ・その他参照した資料（)

【現状分析】

「国文学科 学位授与の方針」において、学生が修得すべき能力として以下を明示している。場所は、本学ホームページの「トップ」→「大学案内」→「京都女子大学について」→「理念・目的」→「学位授与の方針」→「文学部 学位授与の方針」である。

(<https://www.kyoto-wu.ac.jp/daigaku/kyojo/rinen/diplomapolicy/bungaku.html>)

知識・理解

1. 国文学と国語学の分野について、高度の専門的知識・理解・技能を有している。
2. 人文、社会、自然など、広い教養を有している。
3. 宗教に対する正しい理解と正しい批判力とを有している。

汎用的技能

1. 高度の日本語運用ができる。
2. 母語以外の、特定の外国語が運用できる。
3. 数量データを含む多様な情報を収集・分析・表現し、活用できる。
4. 情報通信技術（ICT）を活用することができる。

思考・判断

1. 主体的で批判的・合理的な思考を展開できる。
2. 国文学・国語学の知識・理解等に拠りつつ、広い視野と根拠に基づいて判断できる。
3. 主体的に課題を発見・解決できる。

対話・相互理解

1. 様々な状況に応じた、適切な表現・理解、態度によって対話ができる。
2. 対話・議論を通して、他者（異文化も含め）との相互理解・協調に努めることができる。

社会性・自律性

1. 高い倫理観を備え、市民としての社会的責務に対する自覚を有している。
2. 社会の規範やルールに従って、自らを律して行動できる。
3. 組織の中で、自らの専門的知識・理解・技能、個性や能力を活かして協働できる。
4. 適切なリーダーシップを発揮できる。
5. 国文学・国語学の専門的知識・理解・技能等を活用して、社会に貢献できる。

自立性

1. 卒業後も生涯を通じて学び続けられるよう、自立的な学習能力を身につけている。

また、「国文学科 教育課程編成・実施の方針」において、「学位授与の方針」に示す能力を修得するための教育課程及び教育・学習の方法の概要を、以下のように明示している。

場所は、本学ホームページの「トップ」→「大学案内」→「京都女子大学について」→「理念・目的」→「教育課程編成・実施の方針」→「文学部 教育課程編成・実施の方針」である。

(<https://www.kyoto-wu.ac.jp/daigaku/kyojo/rinen/curriculumpolicy/bungaku.html>)

学位授与の方針に基づいて、1年次からの共通教育においては、宗教に対する正しい理解と正しい批判力とを養います。幅広い教養とともに、言語運用能力や情報リテラシーなど、汎用的能力を身につけ、また、キャリアや健康科学についても学びます。専門領域においては、国文学や国語学の全ての分野についての広い習熟と、各自が選択し専門とする個別分野における極めて高い達成との両立を目指します。全学的教育理念であるアクティブ・ラーニングと少人数教育とを汎領域的教育方法として、体系的に配置された共通領域科目・専門領域科目での学びを、4年間、段階的に進めることで、学年・セメスターの進行ごとに学びを高め深めていきます。

専門領域の教育課程は、以下のようになっています。

1年次では、古典文法を学び直すとともに、国文学史・国語史など、国文学・国語学に関する基礎的知識を身につけ、また発展的講義で、古代から現代までの国文学や国語学の学びを始めていきます。

2年次では、発展的講義で、古代から現代までの国文学や国語学の学びを深めます。また、1セメスターあたり1つの分野を選択し、演習形式での学びを通して、主体的に調査し考える力を養います。この2年次演習では、京都の風土についても実地に学びます。

3年次では、発展的講義で、国文学・国語学の学びをさらに深めていきます。国文学・国語学の、各時代・分野の中から2つのゼミを選択して演習を行い、主体的に調査し、批判的・合理的に考える力を養うとともに、課題発見力や課題解決力を身につけ、表現能力・対話能力も高めていきます。

4年次では、1つの分野に絞って、一段と専門性の高い知識・技能を身につけるとともに、指導教員の個別指導のもと4年間の学修を総合して卒業論文を執筆し、生涯にわたって学び続ける能力の確立を目指します。

上記の学習成果が授与する学位にふさわしいことは、2023年度の自己点検に引き続き、検討・確認している。

自己評価：(S) A・B・C

評価項目②

学習成果の達成につながるよう学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成していること。

<評価の視点>

- ・学習成果の達成につながるよう、教育課程の編成・実施方針に沿って授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

※ 具体的な例

- ・授与する学位と整合し専門分野の学問体系等にも適った授業科目の開講。
- ・各授業科目の位置づけ（主要授業科目の類別等）と到達目標の明確化。
- ・学習の順次性に配慮した授業科目の年次・学期配当及び学びの過程の可視化。

参照資料

- ・R5 設定の主要授業科目表
- ・R5 設定のカリキュラムマップ、ツリー
- ・単位修得要領
- ・シラバス
- ・学修行動調査の学修時間に関する設問（大学）
- ・その他参照した資料（『大学案内』及び本学ホームページ「国文学科」の「カリキュラム」）

【現状分析】

「教育課程編成・実施の方針」に基づき、国文学科では、国文学、国語学を主たる柱として、高度の専門的知識・理解・技能や、主体的に調査し、批判的・合理的に考える力、課題発見力や課題解決力、表現能力・対話能力、生涯にわたって学び続ける能力を身につけるために（又は AP から：高度の日本語運用、数量データを含む多様な情報の収集・分析・表現、情報通信技術（ICT）の活用、主体的で批判的・合理的な思考の展開、主体的な課題の発見・解決、様々な状況に応じたコミュニケーション等ができるよう）、演習科目、講義科目、関連分野の講義科目（国語科教育法、漢文学、中国文学史、東洋思想史、民俗学、風俗文化史、仏教文化史など）から成る体系的な教育課程を編成・実施している。

学科専門教育としては、1 年次から順次積み上げる形で、1 年次は、古典文法の学び直しから始まり（入門演習 A）、国文学・国語学に関する基礎知識を身につけ（漢文学・仏教学を含む国文学基礎講座、国語学概説、国語史、国文学史等）、さらにくずし字解読の技術を修得すること（入門演習 B）によって、2 年次以降に必要な基礎学力を養う。また、1・2 年次を通して発展的講義（各時代及び分野別の講読）を履修することによって学びを深め、研究の方法論を学ぶとともに、2 年次においては、少人数でプレゼンテーションや質疑応答・ディスカッションを行い、レジュメやレポート作成等のアカデミックスキルを身につけ、調査能力を醸成しつつ、種々の実地学習（フィールドワーク）も体験する（基礎演習）。3 年次には、専門的知識と技能をさらに深める（各時代及び分野別の特殊講義）と同時に、時代・分野の異なる二つの演習科目（演習 I）によって、主体的調査・批判能力、合理的思考力を養う。4 年次では、二つの中から一つの時代・分野に絞って演習科目（演習 II）を受講しながら、学びの集大成としての卒業論文を作成することを通して、一段と高い専門的知識と技能を身につけ、課題発見・解決能力を高める。その結果として、生涯にわたって学び続ける能力あるいは姿勢が確立することを目指す。

「学位授与の方針」と、配置している授業科目との関連については、カリキュラムマップにおいて示している（「学位授与の方針」の各項目がバランスよく配置されており、その点においても体系的な科目編成となっている）。

カリキュラム全体の体系性については、カリキュラム・ツリーを作成し、新入生オリエンテーションのほか、1 年次の必修科目（国文学基礎講座、入門演習 A）において解説し、さらに 2 年次・3 年次においても次年度の演習のクラス分けを行う際に繰り返し説明している。また、全学的には作成されなくなった『学習の手引き』も毎年更新し、「京女ポータル」に国文学科学生の Community を設けてリンク集を作り、学生が『学習の手引き』や『単位修得要領』等を閲覧しやすいよう工夫している。

評価項目③

課程修了時に求められる学習成果の達成のために適切な授業形態、方法をとっていること。また、学生が学習を意欲的かつ効果的に進めるための指導や支援を十分に行っていること。

<評価の視点>

- ・授業形態、授業方法が学部・研究科の教育研究上の目的や課程修了時に求める学習成果及び教育課程の編成・実施方針に応じたものであり、期待された効果が得られているか。
- ・ICTを利用した遠隔授業を提供する場合、自らの方針に沿って、適した授業科目に用いられているか。また、効果的な授業となるような工夫を講じ、期待された効果が得られているか。
- ・授業の目的が効果的に達成できるよう、学生の多様性を踏まえた対応や学生に対する適切な指導等を行い、それによって学生が意欲的かつ効果的に学習できているか。

※ 具体的な例

- ・学習状況に応じたクラス分けなど、学生の多様性への対応。
- ・単位の実質化（単位制度の趣旨に沿った学習内容、学習時間の確保）を図る措置。
- ・シラバスの作成と活用（学生が授業の内容や目的を理解し、効果的に学習を進めるために十分な内容であるか。）。
- ・授業の履修に関する指導、学習の進捗等の状況や学生の学習の理解度・達成度の確認、授業外学習に資するフィードバック等などの措置。

参照資料

- ・シラバス
- ・ALCS 学修行動比較調査（1・3回生）
- ・授業アンケート
- ・学修行動調査（大学）
- ・卒業時アンケート（大学）
- ・ジェネリックスキル測定テスト
- ・その他参照した資料（学科会議議事録）

【現状分析】

学習者本位の教育を行っている。例えば、1年次の古典文法の復習（入門演習A）においては、新入生オリエンテーションと同時にテストを行って、入学までの学習状況・理解度に応じたクラス編成をしている。また、卒業論文作成の内容のみならず意欲にも直結する3年次の演習（演習Ⅰ）の第一希望、4年次の演習（演習Ⅱ）は各自の希望通りとしている。希望人数の多い時代・分野は2～3クラス開講し、指導に偏りのないようにしている（教員側の負担についても、クラスが増えた場合は他の担当科目を減らすなど、学科会議において審議し対応）。その効果は、「卒業時アンケート」の「満足度」において、「各授業（講義、授業、ゼミ等全部含めて）人数の適切性」が、2021年度4.11、2022年度4.21、2023年度4.19（パーセンテージでは大変満足32.7%、満足56.6%、計89.3%）と高いポイントを維持していることにも表れている。

同じく「卒業時アンケート」の「身についた能力」については、「全くあてはまらない」「わからない」が、少なくとも学科としての学修内容には含まれない「外国語を使う能力」「数理的思考力とデータ分析・活用能力（数理・データサイエンス、情報科学など）」のみが高く、その他は卒業前には判断の難しい「専門知識や技能を活かして地域に貢献する能力」10%余りを除くと、すべて数%である。つまりほとんどの学生に各能力が身についたとの自覚があることから、期待した効果が得られていると判断できる。

また、「学修行動比較調査」によると、国文学科の場合も文学部の他学科と同様に、「必修科目以外の授業科目を選択する際、何を最も重視しますか」の回答は「シラバス記載内容」が最多の

53.0%である。国文学科では、シラバスの重要性を踏まえ、授業の内容や目的、授業外学修の内容・時間、理解度・到達度の確認、フィードバックの方法等の必要項目の明記など、非常勤講師担当科目を含めた全科目のシラバスの第三者チェックを厳正なものとするよう、学科として意識や情報の共有に努めている。

その他に、「京女ポータル」を利用した各種お知らせ、課題・テスト、教材の提示、フィードバック等に加え、前述の国文学科学生の Community には、教員作成の国文学科用に特化した「電子の蔵」の利用マニュアルを含め、学生の授業外学習にも資するリンク集も作り、1年次の必修科目（国文学基礎講座）や各演習で使い方を説明して、自主的な学習を促している。

また、学習状況以外の学生の特性（要支援の障害を含む）に応じた取り組みとしては、一部の演習をハイブリッド形式で行うなど、各教員が工夫をしている。学科レベルでは、OneDrive を活用して学業面あるいは生活面において指導が必要な学生の必修科目を中心とする履修状況を、全教員が情報共有し、各担当授業や面談等での指導に活かすということも行っている。さらに2024年度後期からは、学力や意欲が不足している1回生に対する「学内の伴走支援事業」を実施すべく申請中である。

自己評価：S (A)・B・C

評価項目④

成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っていること。

<評価の視点>

- ・成績評価及び単位認定を客観的かつ厳格で、公正、公平に実施しているか。
- ・成績評価及び単位認定にかかる基準・手続（学生からの不服申立への対応含む）を学生に明示しているか。
- ・既修得単位や実践的な能力を修得している者に対する単位の認定等を適切に行っているか。
- ・学位授与における実施手続及び体制が明確であるか。
- ・学位授与方針に則して、適切に学位を授与しているか。

参照資料

- ・シラバス
- ・授業アンケート
- ・各科目の成績分布
- ・学修行動調査の成績評価に関する設問（大学）
- ・ALCS 学修行動比較調査（1・3回生）
- ・各種会議の議事録等
- ・その他参照した資料（学科会議議事録）

【現状分析】

シラバスについては、前項でも述べた通り、成績評価、単位認定の方法（アセスメント・ポリシー）がシラバスに適切に記載されていることを、学科全体で確認している。

「学修行動調査」（2024年度。この項目は2回生・3回生・4回生以上が回答）及び「ALCS 学修行動比較調査」（2020年度から2023年度）の「成績評価」に関する設問は以下の通り。

	全体	2回生	3回生	4回生	2020	2021	2022	2023
適正に評価されている	58.7	60.7	58.0	57.8	31.3	43.9	30.0	44.9
自己評価より評価が高い	7.7	8.6	7.0	7.5	20.3	19.8	24.2	15.0
自己評価より評価が低い	1.9	2.9	0.6	2.3	4.7	4.8	3.9	4.7
科目によりばらつきがある	18.9	23.6	21.7	12.7	35.4	21.9	32.4	25.2

後者「ALCS 学修行動比較調査」の「適正」と「評価が高い」を合わせると、前者の「適正」と

ほぼ同じになる。約6割が適正と判断しており（大学全体の「適正」の平均57.6%をわずかに上回る）、成績評価が適切に実施されていることが認められる。

なお約2割が「科目によりばらつきがある」と回答しているが、その内容について検証する必要がある。近年、特定の科目の成績評価が他の同種の科目に比べて極端に高いという問題があったが、現在は解消している。但し「各科目の成績分布」を見ると、複数開講している同一科目の一部に再び「ばらつき」が見られるので、学科会議で審議の上、善処する必要がある。

卒業論文には、主査（ゼミの指導教員）のほかに副査を置くだけでなく、学科で毎年検討し、場合によっては改訂を加えながら全教員が共有している「卒業論文採点基準」に照らして、成績評価の客観性・公平性を保つようにしている。また特に高評価や不可を含む低評価に関しては、学科会議で慎重に検討している。

自己評価 (S) A・B・C

評価項目⑤

学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価していること。

<評価の視点>

- ・学習成果を把握・評価する目的や指標、方法等について考えを明確にしているか。
- ・学習成果を把握・評価する指標や方法は、学位授与方針に定めた学習成果に照らして適切なものか。

参照資料

- ・各種アンケート（ALCS 学修行動比較調査、授業アンケート、卒業時アンケート等）
- ・ジェネリックスキル測定テストの結果
- ・その他参照した資料（ ）

【現状分析】

学生の学修成果評価の目的・指標・方法を明確にするため、また適切にするため学科会議等で議論している。評価の視点や配分についてシラバスに記載し、それをシラバス第三者チェック時に確認・照合している。

さらに、教員側が学習成果を把握する方法及び、そのフィードバックの方法として、2023年度後期末、卒業論文提出後に、学生に「4年間の学びの振り返り」シート（「達成できた点」「達成できなかった点」をそれぞれ学生が記入したもの）を提出してもらい、それに対してゼミ指導教員が、「京女ポータル」のPortfolioの「学修記録」のコメント欄から講評を返すということを開始した（教務システムの変更後は、同様の機能を利用する）。また卒論の評価については、従来も学科で統一の「採点基準」を設けてきたが、それをより細分化・明確化したループリックを、2023年度後期から、4回生ゼミ担当の学科教員全員が活用している。このループリックの内容は、学生が自身の学修成果とその評価を把握できるよう、卒論提出者全員に対して、各ゼミ指導教員から開示している。

また従来、各種アンケートも学習成果及び課題の把握に用いてきた。例えば「学修行動比較調査」によると、「自身の学修成果」についての満足度は、国文学科2回生82.2%、3回生72.6%、4回生以上67.7%である。年次を重ねるごとに減少しているのは、学びを深めることにより自己評価が厳密になってきていることや、学年の進行とともに到達目標が高度化するに伴い、達成度が低下したことに起因したものと考えられる。なお「卒業時アンケート」において、「専門的な知識が身につく授業の多さ」の満足度が88.5%、「幅広い知識・教養が身につけられる授業の多

さ」の満足度が 89.4%と高いことから（大学全体の 86.2%、85.9%を若干上回っている）、学習成果への満足度の減少が提供された授業が原因ではないと判断できる。

自らの学修成果	国文学科全体	2 回生	3 回生	4 回生以上	大学全体
満足している	27.2	28.6	22.9	30.1	33.8
ある程度満足している	46.4	53.6	49.7	37.6	44.0
合計	73.7	82.2	72.6	67.7	77.8

「ジェネリックスキルテスト」によると、文学部の 3 回生はリテラシー（情報収集力、情報分析力、課題発見力、構想力、言語処理能力、非言語処理能力）が全国平均を上回り、コンピテンシー（親和力、協働力、統率力、感情抑制力、自信創出力、行動持続力）が下回る。国文学科はそのことが他の 2 学科よりも極端である。コンピテンシーの中では自信創出力が最も平均に近いことから、自己肯定感については問題がなさそうである。本学国文学科の志望者・入学者の資質でもあるが、1 年次と比較するとリテラシー・コンピテンシー共に伸びているので教育効果が認められる。コンピテンシーのさらなる伸長が課題である。

自己評価：S (A) B・C

評価項目⑥

教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。

<評価の視点>

- ・教育課程及びその内容、教育方法に関する自己点検・評価の基準、体制、方法、プロセス、周期等を明確にしているか。
- ・課程修了時に求められる学習成果の測定・評価結果や授業内外における学生の学習状況、資格試験の取得状況、進路状況等の情報を活用するなど、適切な情報に基づいているか。
- ・外部の視点や学生の意見を取り入れるなど、自己点検・評価の客観性を高めるための工夫を行っているか。
- ・自己点検・評価の結果を活用し、教育課程及びその内容、教育方法の改善・向上に取り組んでいるか。

参照資料

- ・過年度自己点検評価シート
- ・卒業時アンケート（大学）
- ・資格取得状況
- ・進路就職状況
- ・最低修業年限内卒業率
- ・過年度の FD の取組企画と振り返りシート
- ・各種会議の議事録等
- ・その他参照した資料（教員活動報告、学科会議議事録、2024 年度能楽鑑賞会アンケート）

【現状分析】

教育課程及びその内容、教育方法に関する自己点検・評価については、毎年、過年度の「自己点検評価シート」等を参照しつつ、当該年度のそれを学科全体で行っている（原案をもとに学科会議で審議する）。

今年度から始まった学科の「教員活動報告」を踏まえた「学位プログラム」の自己点検・評価として、まず、全員が「学位授与の方針」（DP）及び「教育課程編成・実施の方針」（CP）に則った授業を実施し、学科単位の教育課程としての「学位プログラム」が順調に運用されていることを確認した。

特に各ゼミ（「基礎演習」「演習Ⅰ」「演習Ⅱ」）は、専門科目の中心であり、DPの「知識・理

解」(1.国文学と国語学の分野について、高度の専門的知識・理解・技能を有している。)、「思考・判断」(1.主体的で批判的・合理的な思考を展開できる。2.国文学・国語学の知識・理解等に拠りつつ、広い視野と根拠に基づいて判断できる。3.主体的に課題を発見・解決できる。)、
「対話・相互理解」(1.様々な状況に応じた、適切な表現・理解、態度によって対話ができる。2.対話・議論を通して、他者(異文化も含め)との相互理解・協調に努めることができる。)などの多くのことをめざしている。各ゼミ担当者は、相手に応じた声掛け、事前指導、フィードバック、議論の促し、そのためのLMSのディスカッション機能の活用など、様々な取り組みを行っていることを確認し、さらなる改善・向上のための議論を学科会議で重ねている。

少人数の演習科目とは対照的に、講義科目のうち、国文学科専門科目群の必修科目(「国語学概説」「国文学基礎講座」)、教職科目(「国文学史1A」「漢文学A」「国語科教育1~4」)、オンデマンドの選択科目(「講読」「特殊講義」)は、受講生が基本的に三桁と多い。担当教員は、構成を考えて動画の全体を見なくてはならないようにする、興味を引くようなLMSの課題設定をする、テストの一部を記述式にするなど、大人数のオンライン授業に応じた工夫を行い、シラバス記載の目標の達成に努めていることを学科会議において確認し、教育方法の改善・向上に取り組んでいる。

1回生の必修科目(「入門演習」「国文学基礎講座」)や、2回生以上の各ゼミを中心に、工具書やデータベース、マニュアルの紹介がなされている。このうち「入門演習A」のテキストについては学科で内容を検討し、多くは国文学科の学生全員のCommunityのリンク集に集約されているが、その他については、各教員に任されている。「総合型選抜」B方式の問題や、入学前教育の内容なども視野に入れつつ、国語国文学の基礎知識や、国文学科で学ぶ上での基本的な文献等に関する知識を含め、漏れがないか、「教員活動報告」を承けて、学科で整理・検討している。

以上、「教員活動報告」に基づく。

進路就職状況については、進路・就職委員会を中心に情報共有を行っているが、資格取得状況については各教員が必要に応じて「京女ポータル」のポートフォリオを参照しているものの、学科としての全体的な把握は行っていない。

学生も参画した教育課程、教育方法等の検証としては、文学部改組ワーキンググループでの議論を受けて2020年度末に実施に向けて検討を行い、2021年度初頭にCommunityのアンケート機能を利用して、国文学科学生全員を対象として学科独自にカリキュラムについてのアンケートを実施し、現状維持の要望が強いことを確認した。それ以後は未実施である。

2. 分析を踏まえた長所と問題点

【長所】

「学位授与の方針」「教育課程編成・実施の方針」に基づいた、「卒業論文」作成を具体的な目標とする、一年次よりの体系的なカリキュラムのもと、学科会議を中心に議論や情報共有を行い、学科として組織的に教育と、その改善に努めている。2021年度来のCommunity、2022年度来のOneDriveの活用は、教育・学習に関する情報共有・整理の高度化に役立っている。

また京都の東山にあるという校舎の立地が、国文学科の場合、「学位授与の方針」の「知識・理解」の「1.国文学と国語学の分野について、高度の専門的知識・理解・技能を有している。」、

「思考・判断」の「2.国文学・国語学の知識・理解等に拠りつつ、広い視野と根拠に基づいて判断できる。」に直結しており、強みと言える。例えば、フィールド科目（基礎演習）において、大学によっては宿泊研修旅行を実施しないと行くことのできない場所に、授業時間中に行って帰ってくることができ、宇治や奈良などでの実地学習も日帰りでの実施が可能である。また授業以外に、新入生歓迎行事として毎年「能楽鑑賞会」を開催している（実施経費の出所は本学の「教育活動予算」及び「クラス会費」）。これも、能楽師や狂言師などの古典芸能の専門家が多く京都に住まれている、関心を持った学生が自主的に授業外学習として能楽堂や能楽ゆかりの寺社などに赴くこともできるなど、立地と深く関わっている。なお、開催前には能・狂言の歴史の解説などを行い、事後にはアンケートを行って、感想や要望を確認している。毎回、参加者の満足度は高い。例えば 2024 年度のアンケートの設問3「本日の会で、能楽を含めた日本の伝統芸能への興味・関心が高まりましたか。」の回答は、「非常に高まった」39%、「高まった」44%、「ある程度高まった」15%で、関心が高まった1回生は計98%に上り、行事の意義が再確認できた。以上のように、国文学科では「地の利」を最大限活かして教育課程を構築し、新入生歓迎行事もそれを踏まえて行い、成果を挙げている。

また、国文学科の学生3回生が全国平均よりも下回るコンピテンシー（親和力、協働力、統率力、感情抑制力、自信創出力、行動持続力）の伸張については、国文学会の学生委員（今年度は1回生8名、2回生5名、3回生7名、4回生4名、大学院生2名）に、新入生オリエンテーション、「優秀論文発表会」（前年度の卒業論文・修士論文発表会）、能楽鑑賞会の準備・司会・会場係、「学会ウォーク」（文学散歩）の企画などを任せることが、その一環である。

さらに国文学科では、全学的に各学科に配置された教務委員に加えて、教職実践センター運営委員が「学科内教務委員」として教務委員を補佐し、次年度の教務委員を務めるという仕組みを独自に設けている。これにより複数の教員が、責任を以て学科の教員の担当授業科目、担当授業時間の適切な把握・管理に当たることができ、両委員の発議により、毎回のように入教関係の事項について学科会議で審議を行っている。

【問題点】

コンピテンシーのさらなる伸長が課題だが、上記の国文学会の委員としての活動は、対象の学生の人数も限られており、また長期的なものではない。学科の学生全体を対象とした継続的な対策が必要である。

卒業論文の指導方法は、各担当教員が「演習Ⅱ」のシラバスに具体的に記し、授業時間中にも説明している。大方の学生はそれによって完成・提出ができていないので、指導したいには問題はないと考えられるが、一部ではあるものの心身の不調や他の理由で、それができない学生がいることが課題の一つである。

「数量データ」の解析は、個々の授業単位では行っているが、学科のカリキュラム全体での体系的な位置づけが曖昧である。

3. 改善・発展方策

【改善・発展方策】

学科の全学生を対象としたコンピテンシー（親和力、協働力、統率力、感情抑制力、自信創出力、行動持続力）の伸長を図るはかる方法としては、学生が発表し質疑応答を行う各ゼミで身に付けるべき能力の一つであることを、教員も学生も今以上に自覚することが考えられる。シラバスの「学位授与の方針との関連」にも、「対話・相互理解」の「1. 様々な状況に応じた、適切な表現・理解、態度によって対話ができる。」「2. 対話・議論を通して、他者（異文化も含め）との相互理解・協調に努めることができる。」や社会性・自律性の「2. 社会の規範やルールに従って、自らを律して行動できる。」「4. 適切なリーダーシップを発揮できる。」などを入れる。

令和9（2027）年度の新文学部における国文学科の新カリキュラムを考える時には、他大学との差別化を図るためにも、「長所」に挙げた恵まれた環境や、大学の貴重な資産である図書が活かせるようなものにならないよう、最低限現状維持を図る。なお「数量データ」の分析方法は、各授業、特にゼミにおいて一層自覚的に取り組む。

また卒業論文については、前期卒業予定者に対して既に行っているように、卒論作成作業の進捗状況を教員・学生双方で確認するため、「演習Ⅱ」のシラバスの記述を踏まえた「卒業論文工程表(仮称)」のようなものをゼミごとに作成して運用するなどの具体案を、今後の学科会議で検討する。また、従来の採点基準に加えて、昨年度後期から全教員が評価の際に活用しているルーブリックについて、各ゼミ指導教員が学生に開示する時期を早めることによって、指導の指針(学生側からは到達目標)を明確化する。

学生の受け入れ

1. 現状分析

自己評価：(S) A・B・C

評価項目①

学生の受け入れ方針に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や運営体制を適切に整備し、入学者選抜を公平、公正に実施していること。

<評価の視点>

- ・学生の受け入れ方針は、少なくとも学位課程ごと（学士課程・修士課程・博士課程）に設定しているか。
- ・学生の受け入れ方針は、入学前の学習歴、学力水準、能力等の求める学生像や、入学希望者に求める水準等の判定方法を志願者等に理解しやすく示しているか。

参照資料

- ・学生の受け入れ方針
- ・各種会議の議事録等
- ・その他参照した資料（ ）

【現状分析】

国文学科の「受け入れ方針」（アドミッション・ポリシー）は、他学科と同様に、冊子の『大学案内』や本学ホームページで明示している。

さらに、YouTube の本学公式チャンネルで連載している、学科の専任教員が受験生を主な対象として語りかける「京女の魅力発見セミナー」は、現時点で8回分が掲載されている。第1回から第5回は 2022 年度のNHKの大河ドラマ及び本学の立地にちなみ『平家物語』を各時代・分

野から取り上げ、第6回以降の第2シリーズは、京都と他の古都の関係がテーマである。いずれの回においても、国文学科だけでなく本学全体の特長に言及している。

第1回「源平時代 激動の日本語」(国語学・田上稔)

第2回「すぐその清盛～図書館から～」(中世文学・中前正志)

第3回「源平の時代と能～京都女子大学の周辺をめぐる～」(中世文学・川島朋子)

第4回「近代文学と『平家物語』—書き替えられ、読み替えられる古典—」

(近代文学・峯村至津子)

第5回「『平家物語』と漢文学の様々な関わり—なぜ中学校・高等学校の国語科や

大学の国文学科等で漢文学を学ぶのか—」(漢文学・中島和歌子)

第6回「『小倉百人一首』と京都」(中古文学・小山順子)

第7回「京都と万葉集」(上代文学・池原陽斉)

第8回「淀屋橋ものがたり 京都と大阪をむすぶ」(近世文学・野澤真樹)

これらは国文学科の各時代・分野の内容そのものについてのミニ講義というだけでなく、入学後に学ぶべき内容・水準や、関心の持ち方・学ぶ姿勢などの紹介を兼ねており、求める学生像を示す手段の一つとして位置づけられる。

自己評価 (S) A・B・C

評価項目③

学生の受け入れに関わる状況を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。

<評価の視点>

- ・学生の受け入れに関わる事項を定期的に点検・評価し、当該事項における現状や成果が上がっている取り組み及び課題を適切に把握しているか。
- ・点検・評価の結果を活用して、学生の受け入れに関わる事項の改善・向上に取り組み、効果的な取り組みへとつなげているか。

参照資料

- ・実志願者・延べ志願者推移
- ・入試区分別志願者推移
- ・入試区分別累積 GPA
- ・各種会議の議事録等
- ・その他参照した資料(新入生アンケート)

【現状分析】

「実志願者・延べ志願者推移」によると、2020 年度入試(2019 年度実施)で上向いた後は基本的に右肩下がりが続いているが、文学部3学科の中では実志願者も延べ志願者も、共に最も多い。「入試区分別志願者推移」においても、3学科中いずれも最多であるが、2024 年度入試において特筆すべきは「総合型選抜(A0)」における急増である(13人から25人にほぼ倍増。これは従来のA方式(講義、小論文、面接)に加えて新たなB方式の記述試験の設置によることが、選択人数からも窺える。

「新入生アンケート」によると、本学国文学科を第一希望として入学したのは59.0%で、減少傾向にあるとはいえ約6割は維持している(第二希望は25.4%)。新入生のほか、新入生の保護者や競合校進学者の話によると、少なくとも競合校との第一希望と第二希望の差は、ほとんどないようである。

同アンケートの「進路決定をする際、知りたかった情報」については、国文学科の場合、昨年度と同様に「授業内容」が最も多く 52 人で、「大学の特色」「卒業後の進路・就職先」が 47 人、41 人と続く。回答の意味は、知りたかったのに情報が得られなかったというよりも、知りたかったのでその情報を得て進学したと解すべきであるとのことだが（IR 担当職員による）、いずれにしても「授業内容」について今後も発信し続ける必要があることは確かである。既に行っている取り組みとしては、他学科と同じく、冊子の『大学案内』、その内容を転記した大学ホームページ、オープンキャンパスでの説明、高校への出張講義に加えて、前述した YouTube の本学公式チャンネルでの「京女の魅力発見セミナー」も、授業紹介、大学の特長の紹介を兼ねている。また大学ホームページの学科の「新着情報」は、授業紹介のほかに学科行事や教員の業績・受賞・社会貢献の紹介など様々な角度から学科の魅力を発信している。

2. 分析を踏まえた長所と問題点

【長所】

『大学案内』や大学ホームページの学科のページ、さらに 2022 年度から始めた「京女の魅力発見セミナー」などの独自の取り組みを通じて、授業内容を知りたい受験生には情報が届いていると推定される。

授業のうち、受験生（面談等）やその保護者（育友会の総会後の懇親会）の話によると、オープンキャンパスにおける実地研修科目（基礎演習）の紹介や、上級生の学生スタッフによる学生の立場での説明は、競合校と比較して第一希望を定める際の決め手となっており、成果を挙げている。後者は、例えば「大学の勉強についていけるか不安」という高校生に対し、前述の 1 回生前期の「入門演習 A」を挙げて、「その授業で振り返りをしてくれる」「学力別クラスなので焦らずに授業に参加できる」という点を説明して、高校生が安堵するというようなことが、毎回繰り返されている。

「新入生アンケート」では、データサイエンス学部（DS）と同じく、特に「進路・就職」への不安が多い。『大学案内』では他学科と同様に 1～3 名の卒業生の就職活動が紹介されているが、それだけでは不十分なので、学科独自のキャリア教育として、1 回生の必修科目「国文学基礎講座 A」の 1 回分を利用した卒業生の体験談を聞く回を設けている。さらに 2023 年度には、多様な職種の卒業生による在学生との懇談会を開催した。参加在学生は多くはなかったが、質疑応答も活発に行われて、全体で 2 時間余りに及び、参加学生が豊富な情報を得られた、有意義な会であった。

【問題点】

志願者が募集人員を下回るような極端な事態は発生していないものの、減少傾向にある。

学科の授業内容等の情報を発信する方法のうち大学ホームページの「新着情報」は、国文学科の場合、上記の実地研修の報告が多いので、12 月から 4 月までほとんどない状態が続いている。

3. 改善・発展方策

【改善・発展方策】

志願者の減少への対策として、さらに広報活動を行い、京都女子大学や国文学科のことを未だ知らず、知れば興味を持つ高校生や関係者（特に、「新入生アンケート」において「進路決定する際、最も影響を受けた相談相手」として最多の「母親」、次の「高校の先生」）にアピールし、志願者の開拓を行う（その余地は大いにあると考えている）。大学ホームページの「新着情報」における国文学科の情報の空白期間の12月から4月までは受験期間でもあるので、その時期についても、学科に関する情報発信に努める。「京女の魅力発見セミナー」を継続し、動画としての魅力も向上させる。さらに高校生にとってより親しみのあるSNSでの情報発信についても、今年度内に検討する。不特定多数向けの発信に加えて、2022年度に開始した京都女子高等学校に配布する「京女国文だより」の作成を続け、同校からの推薦入学希望者を増やすことを目指す。

「新入生アンケート」の「大学への期待」としては、史学科やデータサイエンス学部と共に「図書館の充実」が比較的多いが、後述するFDの「本学図書館吉澤文庫所蔵貴重種類の授業等への活用」や、学科の学生研究室の図書の実質、図書館の「電子の蔵」の充実だけでなく学科における利用の実態など、大いに誇れる内容は積極的にアピールしていく。またデータサイエンス学部と同じく、特に「進路・就職」への不安が多いことについては、個人の努力も重要な要素だが、多数のロールモデルや学科として行っているキャリア教育（1回生前期の「国文学基礎講座A」における卒業生のキャリアについての講演や大学院進学説明会、卒業生との懇談会）を紹介することで、多少でも不安が解消されるよう努める。特に学科主催の卒業生との懇談会は1回（昨年度）しか開催していないので、在学生への案内方法を含め、来年度以降の再開に向けて再検討していく。

「学科内教務委員」と同様に、全学的な入試・広報委員を補佐する「学科内入試・広報委員」の設置も昨年度から検討しており、前期中、遅くとも今年度中には結論を出す。

教員・教員組織

1. 現状分析

自己評価 (S) A・B・C

評価項目①

教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を安定的にかつ十全に展開できる教員組織を編制し、学習成果の達成につながる教育の実現や大学として目指す研究上の成果につなげていること。

<評価の視点>

- ・大学として求める教員像や教員組織の編制方針に基づき、教員組織を編制しているか。
※具体的な例
 - ・科目適合性を含め、学習成果の達成につながる教育や研究等の実施に適った教員構成。
 - ・各教員の担当授業科目、担当授業時間の適切な把握・管理。
- ・授業において指導補助者に補助又は授業の一部を担当させる場合、あらかじめ責任関係や役割を規程等に定め、明確な指導計画のもとで適任者にそれを行わせているか。

参照資料

- ・教員組織の編成方針
- ・科目群別非常勤教員比率

- ・各種会議の議事録等
- ・その他参照した資料（授業担当一覧、卒業時アンケート）

【現状分析】

国文学科では、上代文学・中古文学・中世文学・近世文学・近代文学・漢文学・国語学・仏教の各分野・時代を専門とする教員が、それぞれ1～2名ずつ配置されており、「教育課程編成・実施の方針」（カリキュラム・ポリシー）を踏まえた、国文学科に必要な領域の教員がバランスよく在籍する教員組織となっている。また学位授与の方針上、最も主要な科目と位置付けている各年次の演習科目には、すべて専任教員を配置している。その他の主要科目においても、各教員の研究分野や業績にもとづき、各科目を担当している。

担当科目配分の調整は、学科長及び学科の教務委員主導のもと、月に複数回開催される（多い時はほぼ毎週）学科会議での議論や OneDrive を活用した情報共有により、研究業績との適合性の保障はもちろんのこと、特定個人に負担が集中することのないよう調整している。

国文学科専門科目の非常勤率は、28％(2019)→30％(2020)→38％(2021、2022、2023)と推移しており、この5年間は若干増加傾向にある。しかし、文学部の他学科と比べて大きな違いはなく、また授業アンケートや直接的な学生からの聞き取りによると、非常勤講師の先生方の講義などによる多角的な学びが、専任教員による卒業論文を見据えた教育課程を補完するものとして重要であることが確認できるので、適正な非常勤率のカリキュラムとなっていると言える。

また、「卒業時アンケート」における項目のうち「少人数・ゼミ形式授業の内容・数」の満足度（大変満足と満足の合計）89.4％、「教授、先生と学生の距離の近さ」の満足度74.3％、「自分を成長させてくれる教授、先生との出会い」の満足度77.0％から、教員と学生との関係性がもたらすような教育的成果のあったことを一定程度読み取り得る。そのことは、各年次の演習科目に専任教員を配置していることと、かなりの程度対応するものでもあろう。

大学全体の各満足度は88.6％、81.7％、83.3％。

授業の指導補助者に関しては、前述したように、補助のみで授業の一部を担当させることはなく、基本的に各分野の大学院生が学部の演習科目の助言者を務めており、それぞれの指導教員兼授業担当者の指導計画のもとで業務を行っている。

自己評価：S (A) B・C

評価項目②

教員の募集、採用、昇任等を適切に行っていること。

<評価の視点>

- ・教員の募集、採用、昇任等に関わる明確な基準及び手続に沿い、公正性に配慮しながら人事を行っているか。
- ・年齢構成に著しい偏りが生じないように人事を行っているか。また、性別など教員の多様性に配慮しているか。

参照資料

- ・教員の性別・年齢・職位構成
- ・各種会議の議事録等
- ・その他参照した資料（過年度点検シート、教員組織編制方針、本学ホームページ「教員業績データベース」）

【現状分析】

国文学科の教員組織編成は、2024 年4月時点において、男性7名・女性6名、60代5名・50

代2名・40代5名・30代1名、教授7名（うち1名は今年度末定年退職し特任教授に就任予定）・准教授5名・講師1名である。

2023年度に、年齢構成の改善を目的の一つとして、新規採用人事を行った（女性、30代、准教授）。その結果、性別や職位はバランスがさらによくなったが、60代が5名と全体の三分の一以上を占めるなど、やや高年齢化が認められる点は、依然として解消できていない。また50代が少ない点もバランスを欠いている。

昇任人事については、2022年度の2名准教授昇任以来、行われていない。准教授・講師各1名に対して、研究業績の追加を含め、学科として奨励しているところである。

自己評価 (S) A・B・C

評価項目③

教育研究活動等の改善・向上、活性化につながる取り組みを組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上につなげていること。

<評価の視点>

- ・教員の教育能力の向上、教育課程や授業方法の開発及び改善につなげる組織的な取り組みを行い、成果を得ているか。
- ・教員の研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るために、組織的な取り組みを行い、成果を得ているか。
- ・大学としての考えに応じて教員の業績を評価する仕組みを導入し、教育活動、研究活動等の活性化を図ることに寄与しているか。
- ・教員以外が指導補助者となって教育に関わる場合、必要な研修を行い、授業の運営等が適切になされるよう図っているか。

参照資料

- ・過年度のFDの取組企画と結果
- ・授業アンケート（大学）
- ・卒業生アンケート（大学）
- ・ALCS学修行動比較調査（1・3回生）
- ・各種会議の議事録等
- ・その他参照した資料（ ）

【現状分析】

国文学科では、学科会議において、課題や重要情報を共有するとともに、必要に応じて意見交換し検討を加えるという形で、継続的にFDを実施している。そうすることによって、授業そのものはもちろんのこと、成績評価やフィードバック、学業面・生活面における学生への指導と助言を、適切に行えるようにしている。例えば、初年次の少人数授業を改善し充実させるために、教員同士で検討を重ねて「入門演習」における教材の開発と改訂につとめている。あるいは、提出された卒業論文については、その問題点などを教員全員で点検・共有し、次年度以降の論文指導に活かしている。さらに、オンライン環境でも学生達が学習に取り組みやすいような指導を実現するための対策を、学科で話し合っ講じてきた（情報機器周辺の備品の購入、マニュアルの作成を含む）。大学教育の方法論や課題、教材に関する書籍も購入し（購入経費の出所は本学の「学部・大学院図書費」）、教員間で参考図書として活用している。

また、「京女ポータル」のCommunityに国文学科の全学生及び各回生、大学院生、専任教員、非常勤講師の八つのCommunityを設けて、随時アンケートや連絡等を行える体制を整え、実施している。国文学科全体のCommunityのリンク集には研究・教育関連の情報も集約し、さらに専任

教員用では「ハイブリッド授業（会議）運用マニュアル」（学科教員作成）等、授業方法の開発につながる様々な情報も共有している。また前述したように、学科会議に加えて OneDrive を活用して学業面あるいは生活面において指導が必要な学生の必修科目を中心とする履修状況を学科の全教員が情報共有し、各担当授業等での指導に活かしている。

「授業アンケート」の「この授業の到達目標（シラバス記載）は達成しましたか」の項目の 2023 年度前期における微減（4.08 から 3.99）を除き、2022 年度前期から全項目上昇を続けていることや、「卒業時アンケート」における項目のうち「教授、先生の授業への取り組みに対する熱心さ」の満足度が 85.0%（大学全体は 84.4%）であることなどに、以上の取り組みの成果が窺える。

新たな取り組みとして、「本学図書館吉澤文庫所蔵貴重書類の授業等への活用」というテーマでの F D 活動を 2022 年度に開始した（2024 年度終了予定）。本学図書館に多く所蔵されている国文学・国語学関係の貴重書類が、教育面で充分には活用されていない現状を踏まえつつ、より特色ある充実した授業の開発を目指してのものである。なおこれとは別に、図書館の「資料展示コーナー」の展示を国文学科の教員が企画し、指導の一環として大学院生を補助者とすることや「入門演習」「基礎演習」等の授業中に閲覧させることも継続的に行っている。

研究活動については、学科の全教員で構成される編集会議を随時開催して機関誌『女子大國文』を年 2 回発行し、より充実した教育を行うための教員の研究活動を後押ししている。また教員のうちいずれか一人は研究の資質向上を図るために内外研究員留学制度を利用できるよう、各回生のアドバイザーによる学生に対する詳細な説明を含め、学科全体でサポート体制を構築している。なお公開講座は学科の社会貢献が主な目的だが、外部講師を招き、学科の教員も拝聴したり参加学生に対するアンケートの結果を共有・分析したりすることは、教員の教育・研究活動の改善・向上にもなっている。

社会貢献については他に、高等学校からの講義依頼を学科教員が毎年受け、出向いている（2023 年度は 1 名が 2 校を担当。2024 年度は現時点で 1 校）。また YouTube の「京女の魅力発見セミナー」は、受験生が主な対象だが一般向けの講座も兼ねている。

授業の指導補助者に関しては、前述したように、補助のみで授業の一部を担当させることはない。基本的に各分野の大学院生が学部の演習科目の助言者を務めており、それぞれの指導教員兼授業担当者が、その指導計画のもとで指導補助者に対し、指導・助言を行っている。

自己評価 (S) A・B・C

評価項目④

教員組織に関わる事項を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。

<評価の視点>

- ・教員組織に関わる事項を定期的に点検・評価し、当該事項における現状や成果が上がっている取り組み及び課題を適切に把握しているか。
- ・点検・評価の結果を活用して、教員組織に関わる事項の改善・向上に取り組み、効果的な取り組みへとつなげているか。

参照資料

- ・各種会議の議事録等
- ・過年度自己点検評価シート
- ・その他参照した資料（ ）

【現状分析】

学科会議を月に複数回開催して（最多の月は毎週）、教員組織に関わる事項についても随時取り上げているが、特に昇任・採用人事、国内研究の締め切り前の7月・8月、次年度開設科目や担当者の検討時期の10月・11月には、集中的に議論して長所の維持と問題点の解決に努めている。

2. 分析を踏まえた長所と問題点

【長所】

2023年度の新任教員の着任により、高齢化が若干緩和され、卒業論文作成に直結する必修の演習科目をすべて各時代・分野の専任教員が担当できている。

また、本学図書館に多く所蔵されている国文学・国語学関係の貴重書類が、教育面で充分には活用されていないことが以前からの課題だが、その点の改善を目的としたFD活動が行えるのは、国文学科に国文学・国語学・漢文学の全時代・分野を網羅する教員が揃っているからこそである。教員組織の充実、このように本学の蔵書の価値とも無関係ではない。しかも、その中に古典芸能の実演を担える教員がいることは特筆すべき点の一つである。また仏教学の教員も、「国文学基礎講座 A」(1回生必修科目)のリレー講義や、実地学習を伴う「基礎演習 A・B」(選択必修科目)という学科の専門科目を担当し、仏教と国文学との関わりを教授し、学科の専門教育の一翼を担っている。

組織の運営においても、教育・学習及び学生の受け入れにも関わることだが、国文学科では従来、学科主任・学科長を補佐し、庶務などを担当する「運営委員」2名を、年度ごとに定めてきた。近年学科単位での活動が重視され、学科会議の議事録の作成などが義務化されたが、国文学科ではいずれも従来実践してきたことである。

【問題点】

2021年度点検シートに挙げられている「国語教育を専門とする専任教員の配置」については、引き続き検討課題とする必要がある。教員免許取得を希望する学生が多く（2024年度実績は、6月末の時点で、4回生以上34名、3回生43名、2回生59名、1回生57名）、入学志願者増加の一翼を担うと考えられるためでもある。

また、文学部の総合格者数の調整のために入学定員を大幅に超えて受け入れていることに対しても（2024年度1回生は139名、2回生140名、3回生157名、4回生137名。退学者は含まない）、非常勤講師の申請が承認されること以外に保障がないばかりか、2025年度からは教員の定員が1名減となる（特任教授就任により人数を維持できるのは最長で5年間、2029年度までである）。定員以上の学生を受け入れることは、学修面談・教職面談の回数が増えることをはじめ、専任教員にとって授業以外にも種々の負担増がある。「学生の受け入れ」に努めると「教育・学習」に支障をきたすことになる、というのは問題であろう。

3. 改善・発展方策

【改善・発展方策】

今後、学生の定員減が予定されているが（2027年度以降は130名→100名）、少なくとも「教員・教員組織」の現状維持は必須である。2025年度末退職予定者の後任採用を確実なものとするべく、今年度中又は来年度の初期に、学科会議において後任の採用が国文学科のみならず全学的に意義があることが第三者に伝わるよう、検討を開始する。その際、「国語教育を専門とする専任教員の配置」についても再検討する。

また継続中の「本学図書館吉澤文庫所蔵貴重種類の授業等への活用」（具体的には、教員全員が分担して、吉澤文庫所蔵貴重書類を一点ずつ調査・検討して解題目録を作成し、その間あるいはその後に随時会議を開催して、方針の確認や情報の共有、そして授業への活用のあり方に関する協議を繰り返す）について、今年度中に解題目録を完成させ、授業への活用のあり方についての協議を進めていく。

以上です。